

芦屋大学論叢 第80号  
(令和6年1月28日)抜刷

国語科における個別最適な学びと  
協働的な学びの一体化に向けた一考察

—小学校中学年を対象とした文学的文章の学習指導における実践から—

塩 家 崇 生



# 国語科における個別最適な学びと協働的な学びの一体化に向けた一考察

— 小学校中学年を対象とした文学的文章の学習指導における実践から —

塩 家 崇 生

兵庫県伊丹市立鴻池小学校主幹教諭

(芦屋大学臨床教育学部非常勤講師)

## 1. 問題の所在

中央教育審議会が2021年1月に答申<sup>1)</sup>で提起した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向け、全国の各小学校では学習者である児童起点の学びを成立させようと創意工夫した実践を行っているところである。とはいえ、実践方法は関連書籍及び雑誌等で紹介されているものの、それが児童自らの目的意識や課題意識を持つこと、また学習内容の定着に効果があったのかだけでなく、さらにその学習活動後の児童の学びにどのような変化があったのかについては継続的に検証していく必要がある。

水戸部修治<sup>2)</sup>は、答申の本来的な趣旨を踏まえた授業改善を進めることは極めて大きな意義を持つとの理解を示しているが、具体的な学習やそれを支える指導の在り方については必ずしも明らかではないとの課題意識を持つ。そこで本研究ではA県B市C小学校に在籍する小学4年生92名<sup>3)</sup>を対象とし、系統性を意識して行う具体的な学習指導実践及びその効果を見出し、児童意識調査から明らかにする。

本研究の対象校となる小学校では2018年度から「学習に対して受け身であり、自ら考える姿勢を持ちにくい」、「自分の考えを他者に分かりやすく説明することが苦手である」、「学んだことが定着しにくく、次の学習に活かすことが難しい」といった課題が学校評価や全国学力・学習状況調査等の結果から明らかとなっている。その改善にむけて『自ら考え、表現する子の育成』を主題とした校内研究を行っており2023年度は国語科（言語活動）で習得したことばの力を基幹とし、教科横断的な単元の中で活用していく研究に取り組んでいる。本稿では個別最適な学びと協働的な学びの一体化に向けた国語科における文学的文章の学習指導実践に取り組む初期段階（4月～7月）の対象児童の変化に着目して論じていく。

## 2. 研究方法

### 2.1 本実践における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化について

樺山敏郎<sup>4)</sup>は「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化の実現について個別的な学びと小集団及び全体での学びとが常に往還することにより、学びが再構築されていくような生産性の高いものにしていく必要性を説いている。本稿では国語科の文学的文章における学習指導に絞り、児童一人一人の読みが授業を通してより深まっていく学びを目指していく。

二瓶弘行<sup>5)</sup>は、一遍の物語を何度も読み返す意義として、仲間と話し、聞き合う集団での読みの過程で、自分とは異なる読みの存在に気づき、新たな読みと出会えることだと述べる。その過程があるからこそ自分の読みに対する「問い直し」、「理解し直し」、「表現し直し」が可能となる。さらに二瓶<sup>6)</sup>は6年間の系統的な学びの継続こそが児童らの日常生活の中での「一回きりの読書」における「初読の感想」レベルを少し

ずつ向上させていくと主張する。そこで本研究では小学4年生児童を対象とし、5教材<sup>7)</sup>について系統性<sup>8)</sup>を意識しながら行っていく。

文学的文章の学習指導では児童が主体性を発揮し、自分の読み（以下「自力読み」）を探究できる資質・能力を育成することを目指したい。そこで従来の学級児童全員で教師が出した一つの問いについて話し合い、作品理解を深める授業からの脱却を図っていく。そのために、児童一人一人が「自力読み」を探究する活動を積極的に創り出していくための「個別最適な学び」と「協働的な学び」について表1にて整理した。

表1 本実践における「個別最適な学び」と「協働的な学び」についての取り組み

個別最適な学び		協働的な学び
指導の個別化	学習の個性化	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童一人一人の特性や学習進度に応じた学習時間の設定</li> <li>・児童一人一人の学びに応じた個別の指導・支援</li> </ul> <p>&lt;本実践での取り組み&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>→ 一人で学びを自覚する時間の確保（振り返りを授業の終末+宿題）</li> <li>→ 児童一人一人に対し行う振り返りの内容における指導と評価</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の「問い」を児童一人一人が設定できるような支援</li> <li>・児童一人一人が自分の学習方法を選択できるような支援</li> </ul> <p>&lt;本実践での取り組み&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>→ 振り返りの共有を通して児童一人一人の探究のきっかけとなる多様な「問い」を知る機会の創出</li> <li>→ 多様な学び方支援</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分とは違った考え方や見方をもった他者との対話を通して、多様な考え方が組み合わせさり、よりよい学びを生み出すことができるような活動の創出</li> </ul> <p>&lt;本実践での取り組み&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>→ グループ活動のより充実した話し合い活動に向けた機会の創出</li> <li>→ グループ活動の内容に関する指導と評価</li> </ul>

## 2.2 研究方法

### 2.2.1 本研究における文学的文章の学習指導について

本研究では教師の発問や指示に頼らず、自らもしくは友達の間を積極的に解決していこうとする児童を目指すため文学的文章の学習指導では児童一人一人の読みを大切にしながら以下の三項目を目標に指導していく。

- ア. どんな話を捉えることができる
- イ. 問いを立てて考えを持つことができる
- ウ. 自分の考えを本文の言葉やその意味、表現方法等から根拠を持って説明することができる

なお、児童の教材内容における問いやそれを解決しようとする過程、また学習の振り返りの記述内容等を授業者が適切に評価し、各教材での指導事項（表2）に結びつけていく。

表2 本研究における研究計画とその指導事項（小学4年）

教材名	実施期間	指導事項
白いぼうし	2023年4～5月 (授業時数:12) +総合的な学習の時間4時間 <sup>9)</sup>	物語の不思議なところから問いを作り、本文の言葉を手がかりとしてグループ活動や学習の振り返りを通して個々に読み深めていく。
一つの花	2023年6～7月 (授業時数:9)	物語の場面の移り変わりを意識しながら、登場人物の心情変化、情景等について「白いぼうし」の学習を活かし、叙述をもとに想像して読みを深めていく。
ごんぎつね	2023年9～10月 (授業時数:12)	児童一人一人が自分の興味・関心に応じて「問い」を設定し、既習事項を基に作品の特徴である数々の優れた描写に着目しながらその解決を図ることを通して、物語の世界を探究していく。

プラタナスの木	2023年11～12月 (授業時数：9)	児童一人一人が物語におけるイメージを深め、それを具現化する活動を通して登場人物の心情変化や出来事の関係について探究していく。
初雪のふる日	2024年1～2月 (授業時数：9)	これまでの学習を生かしファンタジー作品を自分なりの視点を持って探究する。

なお、本実践では自分の興味・関心に応じた課題設定及び探究活動を通して自力読みの成果を表現するため、第一次（約2～3時間）では教材の全体構造を捉え、問いの共有を図っていく。第二次（約5～8時間）では個の探究と協働的な学びのサイクルを繰り返し、自分の読みをさらに深めていく。しかしながら授業時数に限りがあるため、個の探究については朝学習や家庭学習の時間等を活用して行っていく。仲間が集う学級の時間では主に協働的な学びに重点を置く。そこでの学びの振り返りを家庭学習等で行い、その記述内容を教師が丁寧に把握し、児童の実態に応じて指導及び支援を行っていく。授業後の振り返りについては、「はじめの意識」、「授業中の発見」、「授業中の納得」、「これからの意識」の四つの視点を示し、それを手がかりとして記述するように指導及び支援を行う。振り返りの記述内容から児童の読みを見取り、指導内容に応じて次時の授業導入時等で共有を図っていく。この取り組みを通して児童一人一人の自力読みがさらに深化するきっかけとしたい。

また、グループ活動では班のメンバーで何をテーマに話し合うのか、またどのように学ぶのかも自分達で決定して行う。授業者は児童の活動が児童の読みの深みとなっているのかを確認し、活動内容について評価を行いながら状況に応じた指導及び支援を行っていく。さらに、児童の読みが一面的にならぬよう、全体交流やワールドカフェ交流（以下ワールドカフェ）等で児童同士の考えを共有し、本文の言葉や表現、挿絵、作者に関する資料等、あらゆる視点から自身の読みを「問い直し」、「理解し直し」、「表現し直し」ができる機会をつくっていく。第三次（約2～3時間）の自由な探究の軸となるのが第二次の学習である。授業者は児童の実態に応じてよりよい学びの場の設定を行うことに努めていく。第三次の学習で自分の立てたテーマにおける考察を文章化させていく。

## 2.2.2 児童意識調査

本研究における実践が児童の意識変化を目的とした児童意識調査を4月と7月に5件法<sup>10)</sup>で行う。また、本実践で取り組む学習指導に係る意識調査も7月のみ5件法で行う。調査内容については表3及び表4で示す。

表3 4月と7月に実施する児童意識調査（5件法）

質問内容
ア 国語の勉強は好きですか
イ 国語の勉強は大切だと思いますか
ウ 国語の授業の内容はよくわかりますか
エ 国語の授業で学んだことは、将来自分の役に立つと思いますか
オ 物語文の学習は好きですか
カ 物語にでてくる登場人物のきもちを考えるのは好きですか
キ 自分が伝えたいことを説明するのは好きですか
ク 感想文や振り返りなどの作文を書くことは好きですか
ケ 友達の考えを聞くことは好きですか
コ 友達の前で自分の考えや意見を発表することは好きですか
サ 友達と授業で出てきた内容について話し合うことは好きですか

表4 7月に実施する児童意識調査(5件法)

本実践における 学びの観点	質問内容
個別最適な 学び	ア 本文やさし絵等からイメージしたことを、他の図書やインターネット検索、動作化等から自分に合った方法を選んで考え、物語を読み深めていくことは好きですか
	イ 疑問に思ったことや気になったこと等から自分なりの「問い」を立てることができましたか
	ウ 振り返りは、授業が始まる前の意識、授業中の発見、納得、今後の意欲を意識して書くことができましたか
	エ 振り返りは、4月に比べて「授業で学んだこと」や「友達の意見から考えたこと」、「自分が考えたこと」等について書けるようになりましたか
	オ 友達の振り返りを知ることで、新しい問いが生まれたり、新たな視点が得られたりする等のきっかけとなりましたか
	カ 自分が興味をもったテーマについて、学習の最後に考察するのは好きですか
協働的な学び	キ グループ学習で友達の考えを知ることで、新しい問いが生まれたり、新たな視点が得られたりする等のきっかけとなりましたか
	ク ワールドカフェで他の班で考えていたことを知ることで、新しい問いが生まれたり、新たな視点が得られたりする等のきっかけとなりましたか
	ケ グループ学習やワールドカフェで友達と交流することは、物語を読み深めていくきっかけとなりましたか

### 3. 結果

#### 3.1 文学的文章の学習指導実践

『白いぼうし』及び『一つの花』は4年生における初期段階の文学的文章の学習である。そこで児童一人一人が主体性を発揮した「自力読み」を探究するための資質・能力を育むための手立てとして本文に記述されている言葉に着目して出来事と人物の気持ちを捉えることへの意識を高める工夫が必要だと考えた。そのために授業後の振り返り記述に対して作品を根拠として自分の読みが書かれていたり、教材を読んで考えてみたい問いが書かれていたりする等の記述は授業を通して児童と共有をしたり、教室掲示や学習支援ソフトを活用して視覚化させていったりした。また、総合的な学習の時間を活用して国語科の学習で書いた考察文を学級及び学年で発表する機会をつくった。

##### 3.1.1 『白いぼうし』の実践

本教材はファンタジー作品であることから活動内容については物語の不思議なところに着目させ、そこから問いを作ったり、問いに対して本文の言葉を手がかりとして考えたりしながら読み深めていった。

本実践での「自力読み」に向けた指導ポイントは以下の3点である。

- ・会話や行動とその様子を表す言葉から、その時の人物の気持ちを考える。
- ・色や匂い等を表す言葉から、その場面を思い浮かべる。
- ・繰り返し出てくる物を表す言葉から、登場人物がそれをどう感じているかを考える。

児童が授業後の振り返りの中でそれらに関する記述があれば次回の授業で教師が価値付けしながら端末や教室掲示をしたり、全体指導を行ったりしながら読みを深める技能の定着に向けて共有を図った。また、本実践でのグループ活動は自グループでの活動とワールドカフェでの交流の二つを設定した。自グループでの



活動は各グループの中で話し合っていたテーマを決め、それについて探究していく活動である。しかし、それでは視点が一面的になってしまう可能性が考えられる。そこで、他グループでの活動情報を知ったり自グループでは気づかなかった新たな視点を獲得したりする等の機会をつくることを目的にワールドカフェでの交流を取り入れた。授業のまとめとして、児童それぞれが①『『白いぼうし』にこめられた作者の想いを考察する。』、②「最後の「よかったね」「よかったよ」…の状況を考察する。』、③「ファンタジー世界の入口と出口について考察する。』の3つの中から選んだテーマについて最後の考察文を書いていった。

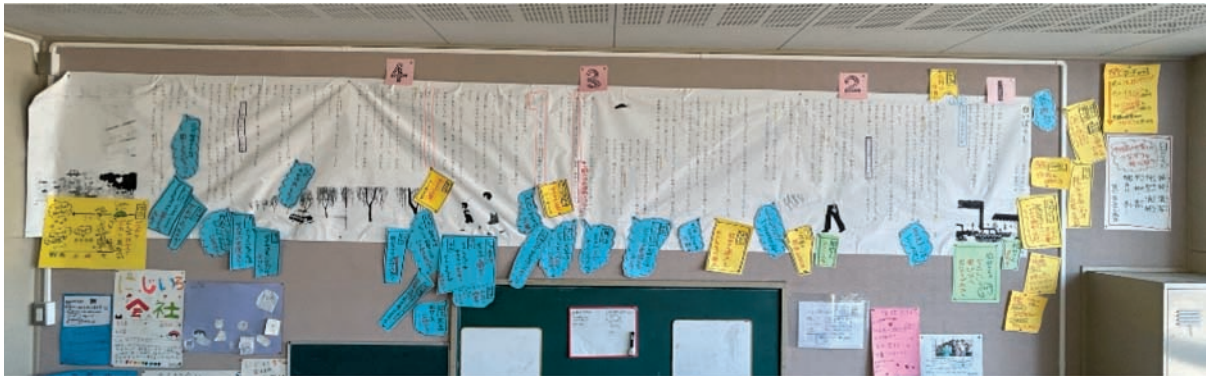


図1 児童の問いや考え等が共有されている教室掲示

### 3.1.2 『一つの花』の実践

本教材は戦争を題材にした作品であり、まずは児童が体験したことのない戦争の状況を本文の言葉から理解させていく。両親のゆみ子に対する想いについて行動描写や情景描写から想像したり、物語の場面の移り変わりを意識しながら苦しい時代の中でも互いに支え合う家族やわが子に対する両親の愛情等について考えたりしながら読みを深めていった。

本実践での「自力読み」に向けた指導ポイントは以下の4点である。

- ・繰り返し出てくる物や言葉がそれぞれの場面でどのように書かれているかを確認する。
- ・場面どうしを比べて、その物や言葉の書かれ方の同じところや違うところを見つける。
- ・書かれ方の違いから、登場人物の気持ち等の変化を想像する。
- ・その物や言葉が題名とどう関係するかを考える。

初読感想文では、『白いぼうし』の学習で学んだ色彩表現や花言葉から読みを深めようとしたり、題名から考えようとしたりする等、既習事項を生かそうとしている児童がいた。また、文中に繰り返し出てくる「一つだけ」という言葉に注目している児童が多く見られた。「白いぼうし」の学習と同様にグループ活動を取り入れながら個別授業を重ねるごとに、「深いため息」や「めちやくちや高い高いする」といった様子を表す言葉に注目する児童の考えからその場面の動作化を行い、ゆみ子の両親の心情をより深く考える活動を行った。



図2 動作化に取り組む児童



図3 グループ活動の様子

本実践の第三次では、5つの場面から児童が特に読みを深めたいところを決め、同じテーマを選んだ児童でグループ活動<sup>11)</sup>を行った。活動内容については集まった児童で学び方を決定して行うため、グループによって読みの交流をしたり、動作化をしたり辞書や友達の考えやこれまでの授業をノートや学習支援ソフト等を活用して振り返ったりしながら最後の考察文を書く活動につなげていった。

### 3.2 本研究における児童意識調査

#### 3.2.1 本研究における実施前後の児童意識調査<sup>12)</sup>の比較

本研究における実践が児童の意識に変化をもたらすことができたのかを明らかにするために、指導前の4月と指導後の7月に調査を実施した。その意識変化の結果から本研究における効果検証を行うためにデータの平均値及びウィルコクソンの符号順位検定を行った。その結果は表5の通りである。

表5 本研究実施前後の児童意識調査結果(5件法) \*\*: $p<0.01$  \*: $p<0.05$

質問内容	データ数	平均値		ウィルコクソンの符号順位検定	
		4月	7月	有意確率	有意水準
ア 国語の勉強は好きですか	81	4.0	4.2	0.086	n. s.
イ 国語の勉強は大切だと思いますか	81	4.6	4.5	0.387	n. s.
ウ 国語の授業の内容はよくわかりますか	81	4.1	4.4	0.004	**
エ 国語の授業で学んだことは、将来自分の役に立つと思いますか	81	4.3	4.4	0.216	n. s.
オ 物語文の学習は好きですか	81	4.2	4.4	0.073	n. s.
カ 物語にでてくる登場人物のきもちを考えるのは好きですか	81	3.9	4.1	0.099	n. s.
キ 自分が伝えたいことを説明するのは好きですか	81	3.4	3.7	0.049	*
ク 感想文やふりかえりなどの作文を書くことは好きですか	81	3.7	4.0	0.008	**
ケ 友達の考えを聞くことは好きですか	81	4.1	4.3	0.081	n. s.
コ 友達の前で自分の考えや意見を発表することは好きですか	81	3.4	3.7	0.023	*
サ 友達と授業で出てきた内容について話し合うことは好きですか	81	3.8	4.0	0.093	n. s.

本研究実施前の4月と実施後の7月の検定結果から大きな違いが見られたのは有意差が1%に満たなかった「ウ 国語の授業の内容はよくわかりますか ( $p=0.004$ )」と「ク 感想文やふりかえりなどの作文を書くことは好きですか ( $p=0.008$ )」の2項目である。また「キ 自分が伝えたいことを説明するのは好きですか ( $p=0.049$ )」と「コ 友達の前で自分の考えや意見を発表することは好きですか ( $p=0.023$ )」の2項目についても有意差が5%に達していないことから研究前後に違いが見られたといえる。

#### 3.2.2 本研究における学習指導に係る児童意識調査

本研究において実施した学習指導について「個別最適な学び」と「協働的な学び」の観点から調査を行った。その結果は表6の通りである。なお、本調査における好意群は各質問内容に対して「とても思う(5点)」、「まあまあ(4点)」を選択した児童の割合を、また非好意群は「あまり思わない(2点)」、「全く思わない(1点)」を選択した児童の割合を示すことにする。



表 6 学習指導に係る児童意識調査結果 (5 件法)

本実践における 学びの観点	質問内容	データ数	好意群	非好意群
個別最適な 学び	ア 本文やさし絵等からイメージしたことを, 他の図書やインターネット検索, 動作化等から自分に合った方法を選んで考え, 物語を読み深めていくことは好きですか	87	74.7%	8.0%
	イ 疑問に思ったことや気になったこと等から自分なりの「問い」を立てることができましたか	86	70.9%	7.0%
	ウ 振り返りは, 授業が始まる前の意識, 授業中の発見, 納得, 今後の意欲を意識して書くことができましたか	86	77.9%	5.8%
	エ 振り返りは, 4月に比べて「授業で学んだこと」や「友達の意見から考えたこと」, 「自分が考えたこと」等について書けるようになりましたか	86	86.0%	4.7%
	オ 友達の振り返りを知ることで, 新しい問いが生まれたり, 新たな視点が得られたりする等のきっかけとなりましたか	87	80.5%	3.4%
	カ 自分が興味をもったテーマについて, 学習の最後に考察するのは好きですか	88	78.4%	9.1%
協働的な学び	キ グループ学習で友達の考えを知ることで, 新しい問いが生まれたり, 新たな視点が得られたりする等のきっかけとなりましたか	86	86.0%	2.3%
	ク ワールドカフェで他の班で考えていたことを知ることで, 新しい問いが生まれたり, 新たな視点が得られたりする等のきっかけとなりましたか	87	80.5%	4.6%
	ケ グループ学習やワールドカフェで友達と交流することは, 物語を読み深めていくきっかけとなりましたか	88	83.0%	6.8%

※調査項目ア, オ, クは各1名、調査項目イ, ウ, エは各2名の記入漏れがあった。

「個別最適な学び」の観点に関連する6つの質問では約7割から8割の児童が好意的であり、その中でも研究開始時とのふりかえりの記述質問については86%の児童が授業内容や自身が考えたこと等を書けるようになったと答えている。「協働的な学び」の観点に関連する3つの質問では全てが8割以上の児童が好意的であることが分かった。その中でも86%の児童が友達とのグループ学習に対して児童自身の新たな問いや視点が得られる機会として好意的に捉えていることが明らかとなった。

## 4. 考察

### 4.1 本実践における「個別最適な学び」

本実践を通して児童に大きく変化が見られたのは振り返りの記述量である。意識調査結果からも8割強の児童が振り返り記述について書けるようになったと回答していることから児童自身にもその自覚があることが伺える。この結果の理由として「はじめの意識」、「授業中の発見」、「授業中の納得」、「これからの意識」の四つの視点を示したことにあると考えている。授業後の振り返りで何を書いていいのかわからなかった児童にとってこの四つの視点を手がかりは記述するのに役に立ったのではないかと考える。また、筆者の肌感覚ではあるが本実践における授業者にとっても振り返り記述が苦手な児童に対して四つの視点からより具体的な例を挙げて指導及び支援できたことも効果的であったのではないかと考える。実際に『白いぼうし』の初読感想文ではノートに一行しか書けなかった児童に対して授業者が四つの視点について丁寧に指導及び支援を行った結果、最後の考察では400字原稿用紙2枚を使って記述できるようになった事例も出てきた。そのことから授業者による適切な指導及び支援は児童の振り返り記述指導において重要であると考えられる。ただし、これについては児童一人一人の学力及び学習状況等に対する実態把握を踏まえて行うことが必要となるだろう。特に作文に対して苦手意識を持つ児童に対しては何に対して課題があるのかを授業者が捉え、その改善に向けた手立てを示していくことが重要となる。

例えば、授業の内容についての振り返り記述が少ない児童に対してグループ活動や全体学びにおいて発言した児童名及びその内容を授業中にメモしておくことを勧め、それを活用して振り返り記述の中に活かすように指導したり、授業者が児童に対して前時の授業における既習事項について確認したりグループ学習等での学習内容について聞き取りをしたりしながら振り返り記述を支援したりするのも改善策の一つになると考える。また、児童の考えを起点とした授業創りの視点から児童の振り返り内容を活かした授業展開も考えていく。児童の振り返り記述を積極的に活かすことにより、児童の振り返りを積極的に書こうとする意欲の向上に努めていきたい。

### 4.2 本実践における「協働的な学び」

児童意識調査の結果からも明らかとなった通り、新たな問いが生まれたり、新たな視点が得られたりすることができるグループ活動に対する児童の期待は高いと考える。また、本活動を通してクラス全体での学びの中では声を出して発言しにくい児童にとっても少人数グループなら話しやすかったことがこの結果につながったと考える。ただし、授業者視点から見ると質的な面での課題が見られた。話し合い活動はしているものの個人の学力や個別学習の実態等によってグループ内での対話が停滞してしまったり、一部の児童のみが一方向的に発言を行っていたりする等の状況が実践を行った研究対象校4学年3学級全てに散見されている。本活動は児童が主となって学習課題を考え取り組むため、質的な課題の改善に向けてグループのメンバー編成は学級状況に応じて考える必要があると考える。また、本実践では自グループ活動とワールドカフェを導入したが、グループ活動の方法についても学級児童の学力や学習状況等を鑑みて実態に適した学習方法を検討していく必要があると考える。これについては、今後の検討課題にしていく。

## 5. 今後の研究について

本稿では、国語科における個別最適な学びと協働的な学びの一体化に向けて文学的文章の学習指導に着目し、その初期段階の実践について児童意識調査の結果から述べてきた。本実践を通して文学的文章の学習における作文活動やグループ活動等に対する意欲の向上や学習内容理解及びその自覚について一定の成果が見られたと考える。ただし、主に児童視点から論じているため、学習に対する意欲・関心については示すことができていないものの国語科として学習指導についての具体的な成果については明らかにできていない。そこで今後は「深い学び」のある児童起点の授業創りをテーマに児童、授業者の両方の視点から研究を行っていく。

### 注

- 1) 中央教育審議会：「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～（答申）. 1-92, 2021.  
[https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto\\_02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto_02-000012321_2-4.pdf) (2023年10月2日閲覧)
- 2) 水戸部修治：小学校国語科における個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた検討ーロングレンジの学習活動を位置付けた授業実践の開発ー. 京都女子大学発達教育学部紀要, 19:75-86, 2023.  
[http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/3714/1/0080\\_019\\_008.pdf](http://repo.kyoto-wu.ac.jp/dspace/bitstream/11173/3714/1/0080_019_008.pdf) (2023年10月2日閲覧)
- 3) 研究対象となる小学4学年は1組31名, 2組31名, 3組30名の3学級である。本研究における学習指導内容についてはどの学級も同様に指導しているため、児童意識調査結果については学級別で表示はしないものとする。
- 4) 樺山敏郎：『学びの文脈』. 明治図書, 13, 2022.
- 5) 二瓶弘行：『二瓶弘行物語の教材研究』. 明治図書, 12-13, 2021.
- 6) 二瓶弘行：同上, 13, 2021.
- 7) 研究実践校では光村図書出版が発行する国語四（上・下）を使用しており、物語教材は『白いぼうし』, 『一つの花』, 『ごんぎつね』, 『プラタナスの木』, 『初雪のふる日』の5作品が採用されている。
- 8) 本研究では系統性を意識した授業構想を行うにあたり、光村図書出版が資料としてホームページに掲載している2020年度版『小学校「国語」光村の「国語」構造と系統』を参考にしている。  
[https://assets.mitsumura-tosho.co.jp/6716/7531/7945/2020\\_k\\_kozo.pdf](https://assets.mitsumura-tosho.co.jp/6716/7531/7945/2020_k_kozo.pdf) (2023年10月2日閲覧)
- 9) 『白いぼうし』の学習では、3つの考察テーマを児童が一つ選択し考察文を書いている。それについて発表をする考察発表会を総合的な学習の時間を活用して学級及び学年で行った。参加した児童が発表者の考察を聞き、質問をしたり意見を交わしたりしながらそれぞれの読みの理解に努めようとした。また、今後の考察に対する意識を高めるために各担任から本教材についての考察を発表した。
- 10) 本調査における5件法の調査は「とても思う（5点）」, 「まあまあ（4点）」, 「どちらともいえない（3点）」, 「あまり思わない（2点）」, 「全く思わない（1点）」の回答形式を取っている。
- 11) 「一つの花」（光村図書）は挿絵が5つあり、それに関連する場面について児童がより深めたい場面を1つ選択する。特に選択する児童が多かった場面は「戦争に行くお父さんがコスモスの花をゆみ子に渡す場面」であった。
- 12) 本調査では学習指導の実施前後で違いが見られたかを明らかにする目的からウィルコクソンの符号順位検定を行っている。そのため、4月と7月の両方とも児童意識調査に回答した児童81名を対象に本検定を実施した。

### Abstract

In this paper, we focus on the integration of optimal individual learning and collaborative learning in Japanese language studies for 4 th grade elementary school students, and conducted a survey of students' attitudes before and after the study and practice of two literary materials as the initial stage of learning and teaching literary texts. The results of the awareness survey revealed certain results in terms of the improvement of students' motivation for writing and group activities in the study of literary texts, as well as their understanding and awareness of the contents of the study.